

タカン語概論

Section 0: 概要

概略

タカン語(タカン語:takancen, リパライン語:takangvirle)は、PMCFアイル共和国タカン人自治区で話されるシアン大語族ラネーメ語族ファスマレー語派アイル諸語の言語である。ラネーメ祖語から派生した言語であり、主にアイル共和国の皇島において話されている。(話者数要考察。150万くらい？バートも同じくらいな気がする)子音と母音のすり減り、開音節化傾向、パイグ語からの借用の多さなどが他のラネーメ言語と比べて特徴と言える部分である。

方言差

方言として以下の二系統があり、それぞれを「北系」「南系」と呼ぶことが多い。これは「大移動」の前の方言分布に由来する呼び名であり、現代のPMCFにおける地理を反映したものではない。

ファリーア・コクシャフィス著『タカン語とその多様な景色』に記載されている方言形をいくつか挙げる。

北系に特徴的な語:

- cula「する(a性語基)」(標準語 cola)
- *tek{a, e}(原義「口」か)と推定される語根を持ついくつかの語
 - tekamamacuka「自信だけあって中味が伴わない者」
 - nagadekacuka「顔が四つあるとされる人物(説話に登場する)」
 - tekemu「上唇の真上か下唇の真下のひげ」

南方に特徴的な語:

- teniku「(首の長い鳥の名)」(標準語 egacu)

""印をつけたものはファレル・ココット著『タカン語の文法』に載っているものを示す。

""印のないものが標準形とされているものである。

文化

文化的には、ラネーメ王朝期は皇論において重要な役割をし、今なお宗教上重要な役割を担っている。

言語史

「古典タカン語」「近代タカン語」「現代タカン語」に大まかに三分割するのが通例である。具体的などのような言語的変化が起きたのかについては、本筋から外れるので、[Appendix A: タカン語の歴史](#)へと分離し、ここではその概略を簡潔に記述するに留める。

古典タカン語

燐字表語表記された資料(いわゆる「伝統文語」)のみならず、表音的資料もそれなりの数散見されるようになってからの言語を、「古典タカン語」と呼ぶ。(表音的資料が出てくる以前の伝統文語資料のうち、当時からの口伝が伝えられているものについても古典タカン語に含めることがある。)古典語はさらにその文体差などによって前期・過渡期・後期に三分割される。

近代タカン語

パイグ語から数多くの語彙を借用するようになり、内容語と機能語を書き分けていくようになった辺りから、書記言語上でも古典期との差が明瞭に現れるようになってきてからの言語を「近代タカン語」と呼ぶ。

現代タカン語

純粹に表音的に用いられるアブギダ体系である「タカン文字」がすっかり定着した辺りを便宜上の境目として、それ以降を「現代タカン語」と称する。現代タカン語を二分割し、リパライン語(そして「大移動」後は東島通商語)からの大量借用を経る前の形を「現代保守的タカン語」、大量借用を経たあとの形を「現タカン語」と呼び分けることもある。

Section 1: 音韻

頭子音

	唇音		齒茎音		口蓋音	
鼻音	m [m]		n [n]			
非鼻音 共鳴音	w [w]		l [r]		j [j]	
破裂音	p [p]	b [b]	t [t]	d [d]	k [k]	g [g]
摩擦音			c [s]	s [z]		

母音

短母音 : a [ä], i [i], u [u] , e [e], o [o]

末子音

母音性末子音 : r [V:], i [j]

子音性末子音 : xなど [C:], n [m ~ n ~ ŋ]

子音性末子音xの表記についてはいくつかの方式がある。

xを用いる方式:kaxcen【互言】、koxna【豆水】
 形態素に依存した方式:katcen【互言】、kotna【豆水】
 子音を繰り返す方式:kaccen【互言】、konna【豆水】

音節構造

音節			
モーラ		モーラ	
頭子音	j	母音	末子音
非義務	非義務	義務	非義務

- ・固有語の語頭には、母音、j, wを除いて有声音はふつう来ない。
- ・固有語、パイグ語借用語の語頭にはpはふつう来ない。
- ・yi, ye, wu, woを含む音節は禁則である。
- ・特に固有語において、形態素内でのhiatus(母音連続)は避けられる。(歴史的にはこの条件下で母音融合を起こしたことに伴う)
- ・iやjの前にある子音は口蓋化する。
 とくにti (tj-) [tɕi], ci (cj-) [ɕi], di (dj-) [ɕi], si (sj-) [ɕi]には注意が必要である。
- ・tu [tɕi], du [ɕi], su [ɕi]などを含む音節におけるuは中舌である。
- ・xは以下のように変音する。
 (p)tkcの前:直後の子音 káxcen [kässew̃]「会話」【互言】
 bmの前:[m]
 dnlの前:[n] kóxna [konnä]「豆から得られる液体」【豆水】
 gの前:[ŋ]

母音の前、語末には立たない。

- ・nは以下のように変音する。
 pbmの前:[m]

linman [ɾimməw̃]「燐字」【清字】

tdnlの前:[n]

tánna [tännä]「タンナ(マナナ島とタカン島の間の海域)」【皇水】

kgの前:[ŋ]

tánke [täŋke]「机戦において駒の動きが変わる場所」【皇処】

kengjádatu [kengjädätsi]「文化省」【地心集】

母音の前、cの前、語末:[w̃]

táka_n [tākāw̃]「タカン民族の、タム神」【皇】
táka_n=c_n [tākāw̃sew̃]「タカン語」【皇言】

語音調

タカン語のアクセントは基本的にモーラを単位として、そのモーラに下降ないしは非下降の音調を付与する事により実現する。仮に非下降をマクロン、下降をグレイブアクセントによって表記すると、

tākà_n「タカン」【皇】
cīmà_n「国」【国】
kjābètù_n「心が圧されること」【心圧】
mūñcōñcīxcícùkù_n「反革命主義者」【無周故し人】

ēmālù_n「ある」【在る】
ūnùnù_n「である」【うぬぬ】
wācù_n「ない」【無す】
mōmēmōkījālù_n「取りに行きたい」【手め行き心る】

となる。これは冗長な表記である(グレイブアクセントの連続する区間は分割されない)ため、マクロンの終端を示してやりさえすればよい。ここではそれをアキュートアクセントで書くこととし、すると、

táka_n「タカン」【皇】
címa_n「国」【国】
kjábetu_n「心が圧されること」【心圧】
munconcixcícuku_n「反革命主義者」【無周故し人】

émalu_n「ある」【在る】
únunu_n「である」【うぬゝ】
wácu_n「ない」【無す】
momemokijalu_n「取りに行きたい」【手め行き心る】

のように書ける。一部の例外を除いてアクセントは品詞と活用に基づいて規則的に付与される。(後述)

句音調

修飾句は上昇的、そうでないものは下降気味に話されるのが通常である。

文音調

疑問文は上昇的、そうでないものは下降気味に話されるのが通常である。

Section 2: 書記体系

アブギダであるタカン文字と、表意的な役割を担う燐帝字母(リパライン語: linzklar)を用いて表記されるのが普通であるが、特にタカン性を強く打ち出したいときなどにおいてはタカン文字だけの表記もされることがある。

タカン文字

j	w	g	k	l	n	d	t	s	c	m	b	p	-	-	
丨	丂	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	a
ー /V:/	や /ja/	わ /wa/	が /ga/	か /ka/	ら /ra/	な /na/	だ /da/	た /ta/	ざ /za/	さ /sa/	ま /ma/	ば /ba/	ぱ /pa/	ぁ /a/	ぁ /a/
𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	e
ん /n/	ゑ /we/	げ /ge/	け /ke/	れ /re/	ね /ne/	で /de/	て /te/	ぜ /ze/	せ /se/	め /me/	べ /be/	ぺ /pe/	え /e/	え /e/	
く	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	i
っ /C:/	ゐ /wi/	ぎ /gi/	き /ki/	り /ri/	に /ni/	ぢ /zi/	ち /tci/	じ /zi/	し /ci/	み /mi/	び /bi/	ぴ /pi/	い /i/	い /i/	
𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	u
ゆ /jw/	ぐ /gw/	く /kw/	る /rw/	ぬ /nw/	づ /zw/	つ /tsu/	ず /zu/	す /su/	む /mw/	ぶ /bu/	ぷ /pu/	う /u/	う /u/		
𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	o
よ /jo/	ご /go/	こ /ko/	ろ /ro/	の /no/	ど /do/	と /to/	ぞ /zo/	そ /so/	も /mo/	ぼ /bo/	ぽ /po/	お /o/	お /o/		

kja などの音節は、ki の後に小書きの a を置くことによって表す。小書きは中央に寄せて書く。ku の後に小書きの a を置くことにより kwa などの音節を表現することはできるものの、これは主に nativize されていない外来語の表記に用いるのが普通である。

燐帝字母

表意的に用いられる文字であり、主に内容語を表現するが、文法的要素の表現に対しても使うことがある。

混合率

燐字を多めに配分して書くこともできるし、タカン文字を多めに配分して書くこともできる。

冠国生島集之国五々而大島五々之母島在而小島之皇島加光島加闇島在。皇言生皇島之言之五々而末古巫於此言筆人於此筆。

冠国や島集あ国うぬねわ大島うぬな母島在れわ小島あ皇島あた光島あた闇島在る。皇言や皇島あ言らうぬねわ古おさ巫此き言れ筆人此き筆る。

あいるしまやどんだつあしまうぬねわあままとのうぬなまなどんえまれわいになとのあたかんどんあたえかどんあたば一たどんえまる。たかんせんやたかんどんあせまらうぬねわそかがおさたかなすかかきせまれかすかかきかる。

Section 3: 動詞の活用

各動詞は、四種類の語基(タカン語: ???, リパライン語: ???)を持つ。子音幹動詞でのそれらの形に基づき、「a性語基」「e性語基」「i性語基」「u性語基」などと呼ばれる。

	a性語基 (連体形)	e性語基 (連用形)	i性語基 (命令形)	u性語基 (終止形)
子音幹	-a	-e	-i	-u
母音幹	-la	-∅	-ci	-lu
特殊幹	-ola	-o	-i	-u

子音幹動詞は、タカン語の本来的動詞の多くを占める語群である。

子音幹	語幹	a性語基	e性語基	i性語基	u性語基
「積む」【積】	cóm-	cóma	cóme	cómi	cómu
「下がる」【下】	út-	úta	úte	úti	útu
「来る」【来】	cák-	cáka	cáke	cáki	cáku
「刺す」【刺】	nonenín-	nonenína	noneníne	noneníni	nonenínu
「色を付ける」【色付】	mogakúg-	mogakúga	mogakúge	mogakúgi	mogakúgu

母音幹動詞は、主に体言由来であるが、古タカンで w 終わりの子音幹 (kewa, kewe, kewi, keu つまりkoo) であったものも現代タカンでは母音幹となっている。j終わりは？

母音幹	語幹	a性語基	e性語基	i性語基	u性語基
「ある」【在】	éma-	émala	éma	émaci	émalu
「話す」【言】	céma-	cémala	céma	cémaci	cémalu
「見る」【目】	áta-	átala	áta	átaci	átalu
「鑄込む、型にはめる」	kéwa-	kéwala	kéwa	kéwaci	kéwalu
「言い伝える」【付言】	kugecéma-	kugecékala	kugecéma	kugecémaci	kugecémalu

特殊幹動詞は、cu, acu の二単語、および acu が別の動詞の後ろに融合した形として登場する。

特殊幹	語幹	a性語基	e性語基	i性語基	u性語基
-----	----	------	------	------	------

「する」【為】	c-	cóla	có	cí	cú
「できる」【能】	ac-	ácola	áco	áci	ácu

原則的にアクセントは、子音幹動詞なら後ろから二番目のモーラ、母音幹動詞なら後ろから三番目のモーラに付与される。ただし、únunu「である」、mořlu「行く」は例外。

u性語基

u性語基は文末に来て述語として主体の動作を表す形であり、国文法における終止形と同様の振る舞いを示すと考えてよい。

- címa émau.「国がある。」【国在る。】

i性語基

i性語基は文末に来て命令・希望・義務といった意味を表す。パイグ語の ly【須】の意味用法とよく似ているとも言える。

- mé ki átai.「これを見よ。」【茲き目し。】

i性語基それ自体を母音幹動詞として用いることで、推量・意思・使役など意識性を示す。

- morcilu mu?「行きたいのか？」【行しるむ？】

i性語基に -ja- を補ったものを母音幹動詞として用いると、意志・欲求などを表す。

- nó ja úku ki jamijau.「私はなにか食べたい。」【我や物き口みやる。】

a性語基

a性語基は、直後に体言を伴ってその体言を修飾する。

- tákan=cen ki caneníta áku「タカン語を学ぶ本」【皇語き識ね入た書】

直後に体言を伴わず、a性語基自体を体言として用いることもできる。

- tadeníta únunu.「集まったものである。」【集で入たうぬ。】

a性語基の後ろに -ta を付けることで、すでに完了したことを示す。

- tádata.「集まった。」【集だ終。】

a性語基に c- を付けて特殊幹動詞として用いることで、自発・可能といった、無意識にできることを示す。能力可能も状況可能も表せるが、蓋然性・可能性 (possibility) を表すのに用いるのは i 性語基であり、a性語基 + c- で表すことはできない。

- kii ja atalacolacu.「彼らは見ることができる。」【彼らには見える。】【彼等や目ら為す。】

cf. kii ja átaci.「彼らは見る事が可能である。」【彼らには見えるかもしれない。】【彼等や目し。】

e性語基

e性語基は、単独で用いることで文の主動詞を修飾する。

- kijákaga únune áika ja cakenítu mu?「昼間であれば、光は入ってきたのか。」「【日時うぬね光や来け入つむ?】

e性語基を -wa で支えることにより、主動詞の修飾を明確化できる。

- mé ki átawa「これを見て」「【茲き目わ】

e性語基を -ken で支えることにより、前提条件を表していることを明確化できる。

- mé ki átaken「これを見れば」「【茲き目けん】

なお、-wa, -ken はそれぞれ燐字で【而】【即】と書けるが、母音幹動詞に付けるときには読みやすさのためタカン文字で書くことが多い。

また、e性語基は一部の補助的な動詞と緊密に結びついて、アスペクト・移動性・待遇表現などといった豊富な表現を生む。

- tákama=cici ja ketémalu.「タカマさんは良い」「【たかまししや善まる】

e性語基は、タカン文字を送らずに燐字だけで書くことが比較的多めである。

Section 4: 補助動詞

タカン語には、動詞と結びついて、アスペクト・移動性・待遇表現といった文法機能を表示し、自身も動詞として振る舞う詞がある。主にe性語基と結びつくが、いくつかの補助動詞は歴史的経緯のためにe性語基以外の語基を要求する。

アクセントは、

- 補助動詞側にアクセントがあれば、補助動詞側のアクセントを用いる
- 補助動詞側にアクセントがないなら、本動詞側のアクセントを用いる

というのが原則だが、únunu「～である」、mořlu「行く」はアクセント上の例外であるため、それぞれについて明記する。

アスペクト

完了

(a)ta【た】【終】[例外動詞のアクセント: únunata, mořlata]

すでに完了したことを示す。接続対象はe性語基でなくa性語基であるし、自身が動詞として振る舞うわけでもないが、かつては他の補助動詞と同様にe性語基に接続しつつ自身も活用していたことから、伝統的に補助動詞と見なされる。

- kúwa=cici ja bepicasořnike kan mořlata.「クワさんはヴェフィス大学に行った。」「【筆ししや淮上学処かん行ら終。】
- kúwa=cici ja bepicasořnike kan émalata.「クワさんはヴェフィス大学にいる。」「【筆ししや淮上学処かん在ら終。】

活用しなくなったものの、-wa や -ken で支えることができるなど、痕跡的にe性語基として振る舞いを残している。しかしながら修飾の機能は失われており、文の主動詞を修飾したり、補助動詞を続けることはできない。

存続

(é)mu【む】【在む】[例外動詞のアクセント: unúnemu (方言形 ununému), mofmu]

動作や状態の継続を示す。

- ká a ínuci ja inucálita kan mofmu mu?「この川はイヌサリタに行っていますか?」【此あ川や川入かん行むむ?】
- ká a ínuci ja inucálita kan námu mu?「この川はイヌサリタで流れていますか?」【此あ川や川入かん水むむ?】

ムード

意識類

無意識

(á)cu【す】【能す】[例外動詞のアクセント: unúnacu (方言形 ununácu), morlácu]

a性語基に接続して、特殊幹で活用し、自発・可能といった、無意識にできることを示す。能力可能も状況可能も表せるが、蓋然性・可能性 (possibility) を表すことはできない。

- nó ja nimálane=cen ki cemalácu.「私はリパライン語を話せる。」【我や哩言き言能す。】
【我や哩言き言らす。】

意識

(i)lu【る】【心る】[例外動詞のアクセント: ununilu, morcílu]

推量、意思、使役など意識性を示す。i性語基に接続する。

- kí ja takamácuka ununilu.「彼はタカン人だろう。」【那や皇人うぬにる。】
- ailúcuka ja mekácuka ki tadilata「アイル人がパイグ人を集めさせた。」【冠人や牌人き集心ら終。】

意欲

(i)jalu【やる】【心る】[例外動詞のアクセント: unúnijalu, morcíjalu]

意志・欲求などを表す。i性語基に接続する。

- má ja ná ki momecakijalu mu?「あなたは水が欲しいですか?」【汝や水き受心るむ?】
【汝や水き手来心るむ?】

(i)lu と (i)jalu の隣字表記

(i)lu, (i)jalu は本来的には ija【心】に由来する語であるため、これを隣字表記する際は、以下のようにする。

子音幹

utilu「下げるだろう、下げるつもりだ」→【下心る】【下ちる】

utíjalu「下げたい」→【下心る】【下ち心る】【下ちやる】

ただし、ununílu「～であるだろう」は、【うぬ心る】と書くと極めて読みづらいため、→【うぬにる】

母音幹

morcílu「行くだらう、行くつもりだ」→【行しる】(【行為る】と書くのは非標準的)

morcíjalu「行きたい」→【行し心る】【行しやる】(【行為心る】と書くのは非標準的)

待遇類

尊敬

(é)tu 【つ】【下つ】[例外動詞のアクセント: unúnetu, mořtu]

動作主への敬意を明示する。

- ná ki momemokéti.「水を下さい」【水き与下ち】【水き手行下ち】

(á)cu と組み合わせて使うこともある。(e)tácu の語順では相手側にそれが可能であることを前提とした依頼表現となるが、(a)cétu の語順では可能の語義が弱まり、単なる丁寧な勧誘となる。

- ná ki momemoketácu mu?「水を下されますか? (普通の依頼)」【水き与下能すむ?】
- ná ki momemoketácu?「水を下されますか? (ややくだけた依頼)」【水き与下能す?】
- ná ki momemoketácu.「水をお与えになることができますよねえ。(高圧的・皮肉的な依頼)」【水き与下能す】
- sořnike oca cakacéti.「大学からお越してください。」【上学処おさ来能下ち。】

謙譲

(e)cólu 【上る】[例外動詞のアクセント: ununecólu, morcólu]

被動作主への敬意を明示する。

- ká a áku ja nó a kacóla únunu. (この本は私が書かせていただいたものでございます。)
【此あ書や我あ筆上らうぬ。】

(e)cólu の a性語基 (e)cóla は、特殊幹 (á)cu の a性語基 (á)cola と紛らわしいので注意。

- kacóla áku「書かせていただいた本」【筆上ら書】
- cikecóla méma「座らせていただいた土地」【席上ら地】
- cikácola méma「座ることができる土地」【席能そら地】

瞬間類

開始瞬間

(e)jánu 【生ぬ】[例外動詞のアクセント: ununejánu, morjánu]

動作動詞を、動作が開始した瞬間に注目した瞬間動詞にする。

- a, kanejánata.「あっ、燃え始めた(=火が出た)。」「噫。火ね生終。】
- nó ja má a sáka ki canejánata.「私はあなたが来るのに気づいた」【我や汝あ来かき識ね生な終。】

終了瞬間

(e)nítu 【入つ】[例外動詞のアクセント: ununenítu, mornítu]

動作動詞を、動作が終了した瞬間に注目した瞬間動詞にする。

- nó ja cetágeka ki canenítu.「私は机戦を理解する。」「【我や机戦き識ね入つ。】
- a, kanenítata.「あっ、燃え終わった(=火が消えた)。」「【噫。火ね入終。】

移動類

移動隔離

(e)móku【行く】[例外動詞のアクセント: ununemóku, mormóku]

離れ行く動作を示す。

- ká a ínuci ja inucálita kan mormokému mu?「この川はイヌサリタへ流れていっていますか?」「【此あ川や川入かん行行けむむ?】

移動接近

(e)cáku【来く】[例外動詞のアクセント: ununecáku, morcáku]

近づいてくる動作を示す。

- ká a mó ki acicáke ken, mákati kan cakácu.「この道を辿ると、天神に来ることができます。」「【此あ道き辿来け即天神かん来能す。】

比況

(é)mulu【むる】【如る】[例外動詞のアクセント: unúnemulu, mořmulu]

比喩表現を作る。

- kí ja noneninému cémale ken, tádu ja mugecákata.「彼は刺すように話したので、団体は醜くなった。」「【那や刺如言れ即集や獣げ来か終。】
- coñcitu ja káni unúnemulata.「革命は火のようであった。」「【周故や火うぬねむら終。】

Section 5: 体言とそれにつく接辞

アクセント

基本的には体言の後ろから3モーラ目にアクセントが来る。

- kijákaga「昼、日中」【日時】
- námana「死神」【なまな】
- uómuka「ウオムカ(人名)」【墨風】

体言が2モーラしかない場合は後ろから2モーラ目にアクセントが置かれ、体言が1モーラしかない場合はその唯一のモーラにアクセントが来る。

- médu「闇」【闇】
- móga「色」【色】
- cémo「月」【月】

- kii「彼ら」【彼等】
- máka「数」【値】
- mó「道」【道】
- tí「それ」【其】

n【ん】は一モーラとして数えられる。

- món「米」【米】
- tákan「タカンの」【皇】【たかん】
- táanna「タンナ(マナナ島とタカン島の間の海域)」【皇水】【たんな】
- coñcitu「革命」【周故】【そんしつ】

r も一モーラとして数えられる。

- tónir「リパラオネ教の神・神族」【とに一】
- tárpu「tarfさん」【たーぷ】
- sofnike「大学」【上学処】

しかし、外来語を借用して母音が増えた場合などについては、例外的な挙動を示すこともある。

- bélepisi「遊び」【べれびし】

また、一部の接尾辞は、名詞のアクセントを動かさない。本書の転写では = で書く。

- linécita=cen「リナエスト語」【清？た言】
- kásika=cici「カジカさん」【筆席しし】

接辞

ki【き】【於N】

直接目的語を作る。

- ká ki ká-lu.「これを書く。」【此き筆る。】

a【あ】【之】

修飾語を作る。

- mé ja tákan=cen a áku únunu.「これはタカン語の本です。」【茲や皇言あ書うぬゝ。】

kan【かん】【かん】

間接目的語を作る。場所詞を伴うことが多い。

- kí a címa kan móf-lu.「あの国に行く。」【那あ国かん行る。】

men【通】【めん】

経路点を示す。現代では使用されることは稀。

- ká a ínuci ja inucálita men mófmu mu?「この川はイヌサリタを通っていますか？」【此あ川や川入めん行るむ？】

oca【束】【おさ】

起点を示す。場所のみならず理由にも用いることができる。

- tákan=don oca makatisófnike kan mófken nancókaku únunu mu?「タカン島からマカチ大学まで行くと何片時(時間の単位)ですか？」

【皇島来天神上学処かん行即何片時うぬゝむ？】

- ínina máni ki áčila oca nó ja kolicákata.「小さい文字を読んだので私は疲れた。」
【小字き辿あ来我や疲来かた。】

ata【加た】【あた】

- línman ata tákan=mani ja táde tákan=cen a áku émalu.【清字加た皇字や集で皇言あ書
在る。】「隣帝字母とタカン文字が集まって、タカン語の本が在る。」

ju【亦】【ゆ】

- má ja áku ki mogakúgata ken nó ju mogakúgata.【汝や書き色付が終即我ゆ色付が
終。】「あなたが本に色づけしたので、私もまた色づけした。」

ja【や】(【生】と書くのは古い)

主題を作る。ただし、日本語と異なり従属節にも登場できる。

- muka ja cósaken ínuci kan morcíjalu.【風や穏即川かん行し心る。】「風が穏やかなの
で、川に行きたい。」

o【お】【亦】

- nó o cetagekacíjalu.【我お机戦し心る。】「私もパイグ将棋したい。」

tetu【てつ】【唯N】

- má ja tetu cáka wacácu.【汝や唯来か無能す。】「お前だけは来ることができない。」

複数の接辞

合成語

体言どうしの合成語

体言と体言が複合語を成す際には、二つ目の語の語頭が t- → d-, c- → s-, n- → l-, k- → g- という変化を起こす傾向がある。これは歴史的には a【之】の語末に鼻音が存在したことに由来する。

- móju「兄弟」【輩】+ tómu「島」【島】→ mojúdomu「隣り合った大きさの近い島」【輩島】
- játu「冬」【冬】+ cémo「月」【月】→ jatúsemo「冬の空に浮かぶ月」【冬月】
- káni「火」【火】+ námana「死神」【なまな】→ kaniłámana「致死性の熱病」【火らまな】
- císa「足」【足】+ kúwi「傷」【傷】→ ciságuwi「足の傷」【足傷】

二つ目の語の語頭が m- である場合、かつての形が p- であった場合は b- へと変化することがある。

- címa「国」【国】+ méma「土地、世界」【地】→ cimábema「国土」【国地】
- kína「右」【右】+ mómo「手」【手】→ kinábomo【右手】

しかし、二つ目の語の語頭が本来的に m- である場合は変化しない。

- múga「醜さ」【獣が】+ món「米」【米】→ mugámon「見た目も味もよろしくない野生の穀物」
【獣が米】

ただし、cuka「人」【人】は原則として -suka とはならない。これはこの語の形がかつては acuka であったことに由来する。

- wépica「ヴェフィス共和国」【淮】+ cúka「人」【人】→ wepicácuka「ヴェフィス人」【淮人】

-n 終わりの語がこのようにして複合語を成す際、-na- や -ma- として表れることが多い。

- món「米」【米】+ tádu「集まり」【集】→ monátadu「塩で味を整えた握り飯」
- tákan「タカン」【皇】+ cúka「人」【人】→ takamácuka「タカン人」

Section 6: 統語

Appendix A: タカン語の変遷

(表語的な伝統文語に覆い隠され、音韻の実態が痕跡的にしか掴めない時期)

↓ 表音的資料の出現

「古典タカン語前期」

↓

現象	裏付け
語頭の有声障害音や l によるアクセント体系の複雑化	当時の音楽においては、語のピッチパターンに合わせて音程が振られていると考えられるが、有声障害音や l で始まると再構される単語でだけ変化が観測される
母音の割れ？	【兵】[*kɔ] が【此】[*ka] +【下】[*u] などと綴れるようになった。本当に母音が割れていたのだろうか、それとも表記のみの問題？
有声障害音の合流？	【倉】[*ɾi] があるべきところに【小】[*ni] が出てくる例などが散見される。b [b], s [z], d [d], g [g] についてはもともと表記上区別されないため、よく分からないが、前述のアクセント体系の複雑化を踏まえると、l → n と並行して起きたと考えるのが最も自然であろう。

↓

「古典タカン語過渡期」

↓

現象	裏付け
p → m	表記の混乱(ここに具体例が入る)
ai → e(一部の語頭では起きない)	表記の混乱(ここに具体例が入る)、「近頃の若いもんは」

ei → e	「近頃の若いもんは」
eu → o	表記の混乱(ここに具体例が入る)
nb → b	「近頃の若いもんは」
ns → s	表記の混乱(ここに具体例が入る)
nd → d	表記の混乱(ここに具体例が入る)
ng → g	表記の混乱(ここに具体例が入る)、「近頃の若いもんは」
nl → l	直接の資料は無いが、状況証拠的におそらくこのタイミングしかない
低スタートの語にアクセント記号	基本的にはかつての b, s, d, g, l と同じだが、一部語彙は例外的な発展を見せており、かつての b, s, d, g, l と必ずしも一致しない

↓

「古典タカン語後期」(この前後が古典期としては最も文献数が多い)

↓

現象	裏付け								
パイグ語からの大量借用	・「近頃の若いもんは」 ・借用語を勘定に入れないと音節数の合わない詩								
アクセント体系の変化 <table border="1"> <tr> <td>óòò</td><td>óòò</td></tr> <tr> <td>ǒǒǒ</td><td rowspan="2">ōòò</td></tr> <tr> <td>ǒǒò</td></tr> <tr> <td>óōò</td><td rowspan="2">ōōò</td></tr> <tr> <td>ōōò</td></tr> </table>	óòò	óòò	ǒǒǒ	ōòò	ǒǒò	óōò	ōōò	ōōò	・音楽 ・当時の記述 ・子音幹動詞から「低スタートアクセント」が消えていく
óòò	óòò								
ǒǒǒ	ōòò								
ǒǒò									
óōò	ōōò								
ōōò									
動詞の文法化	表音的資料から自明に見てとれる								
書記言語における文脈依存性の低減(機能語の崩し書き、助詞類の挿入、句読点)	資料から自明に見てとれる								

↓

「近代タカン語」



現象	裏付け
タカン文字の定着	資料から自明に見てとれる
さらなる動詞の文法化	表音的資料から自明に見てとれる
多くの方言でのアクセント対立の消失	



「現代保守的タカン語」



現象	裏付け
リパライン語・東島通商語からの大量借用	明らか



「現タカン語」

- このような歴史的背景により、これらの時代には文学的に大きな影響を与えた作品などが書かれたことから、これらの時代のタカン語のことを「古典タカン語」と訳出することもある。
-

時代が下るにつれ、語頭の

当時の音楽における語それぞれについてのピッチパターンがかなり一貫しており、現代タカン語と異なる複雑なピッチアクセント体系を持っていたことが分かっている。

創作者用資料:タカン語文献

☰ にほん言き学来か書

☰ 皇語唯めん皇語き識ね入た書

☰ タカン語文法記述月間

✚ 古皇覚え書き

📄 タカン語あれこれ_画像化